

支那の民家から感謝された衛生兵

長崎県 福田 厚

「福田厚、あなたは身体は立派であるが残念ながら目が悪いので第一乙種合格とする」との宣告されたのは昭和十七（一九四二）年七月徴兵検査会場での徴兵検査官の言葉でした。

甲種合格にならず残念と思いましたが、八カ月前太平洋戦争が勃発したばかり、いずれ国からのお召があるかと覚悟を決め、大阪のデパートの職場に帰りました。支那事変の戦火は支那全土に拡大し、南方では破竹の勢いで太平洋の島々に進撃し、正に大東亜戦争の戦火は拡大していききました。

私は長崎県古浜町雲仙温泉で旅館業を営む、福田家の男三人女二人の二男として大正十一（一九二二）年七月十五日生を享けました。雲仙小学校から小浜小学校を卒業し大阪の高島屋デパートで働いておりました。

昭和十八年六月、召集令状が雲仙の自宅にきました。大坂から急いで自宅に帰りますと大村の歩兵第四十六連隊第九中隊に入隊せよ、ということ、当日、両親達に見送られ雲仙小浜バスという小さなバスで小浜の町に下り、ここから伊藤さんという三十年配の方と二人で大村の歩兵連隊に入隊しました。

既に兄も兵隊に行っており、両親も御国のために役に立つことは覚悟していたようで「体に注意して頑張れよう」といつて見送ってくれました。

入隊してからの毎日は厳しい訓練でした。大村の歩兵第四十六連隊といえは全国でも有名な精鋭部隊として名が轟いておりましたので、叩かれ殴られ時には編上靴で叩かれることもありました。涙を流しながら歯をくいしばって頑張りました。余りにも厳しすぎるので制裁を禁じられるようになりしました。

たまたま衛生兵が転属したため各中隊より衛生兵の募集があり、私も応募したところ運良く合格、

大村陸軍病院で三カ月間衛生兵としての教育を受けることになりました。そして大村連隊付の衛生兵として努めていたのですが、久留米の連隊でも衛生兵が不足し、その応援に行きましたら、そのまま久留米の連隊に転属となりました。そして久留米陸軍病院の二十二病棟のマリアア病専門の病室勤務となりました。

その病棟にはガダルカナル島でマリアアに罹って入院している人がいてガダルカナル島や南方戦線での苦労も知り勉強になりました。二十一病棟は精神病病棟で鉄格子がはめられ、二十人余りが収容されていました。叩かれて気が狂ったり、厳しい訓練で精神に異状を来たした人達だと聞きました。二十二病棟には看護婦が二人おり、マリアアの治療に私と一緒に努力してくれました。

戦火の拡大と共に内地勤務者が次々と南方へ転属を命ぜられて移動されます。その様子を見て私も戦地行きを志願しましたら、看護婦達がなんで危険な所に志願までして行くのですかと笑いまし

た。

たまたま久留米、小倉、善通寺の各陸軍病院勤務の衛生兵を主力として患者輸送隊が佐世保重砲兵隊で編成され、その一員として佐世保重港より台湾の高雄港に向いました。それは昭和十九年四月で佐世保重砲兵隊の桜が満開でとても美しい時でした。日本の美しい桜もこれが見納めかなあと思いました。

当時は米潜水艦により日本の輸送船が次々と攻撃を受け沈没していましたので不安でした。船酔いで苦しみながらも輸送船は高雄港までは無事到着しましたが、高雄港の入口には沈んだ船のマストが見え戦争の事実を物語っていました。高雄港からはバシー海峡が危険水域のため出港が出来ず、約二カ月船の中の生活が始まりました。時折バナナを買って食べながら、この瞬間にも前線では多くの人達が一身を投げ打って戦っている、こんな呑気なことではないのだろうか、制海権、制空権の不足に苛立ちました。

二カ月ぐらいで出港の許可が下り、一隻はフィリピンに、私達は南支那の広東港に向つて出港し、二日後には広東港に無事入港し、直ちに広東陸軍病院へ向いました。

広東陸軍病院は立派な病院で多くの人が勤務しており、久留米陸軍病院の分院的な存在でした。

院長は福岡県田立丸町江上病院の院長先生で江上軍医大尉殿でした。他に四人の軍医がおり、久留米から派遣された人も多くおりました。その中に島原市出身の小笠原さんという日赤の看護婦さんもおりました。

私達は軍医一人、下士官一人、兵隊五人計七人で一個分隊となり、負傷兵の救急輸送隊として病院を離れて第一戦に向い、負傷した人達を陸軍病院へ後送する任務に就きました。途中で死亡の方は土葬し切り取った指をガーゼで包んで持ち歩き、広東の陸軍病院に持ち帰って安置室に納めました。南支はクリークが整備されていきましたので団平船を利用して移動しましたが、負傷者の運搬にもこ

の団平船とクリークを利用しました。

支那大陸は広いですねえ。広々とした原野を見ながらいつ敵が襲つて来るかわからない中を負傷者と病人を探して歩きました。僅か七人の私達も何回か敵兵に襲われ困つたこともありました。

負傷者をクリークで転送中、飛行機が飛んで来たので「友軍機だ」と叫んだ有家町出身の中村戦友が、米軍機の機銃掃射で戦死するという悲しい出来事もありました。私達は日本軍の負傷者や病人だけでなく、支那の人達が病気で苦しんでおれば薬を与えて治療してやったことも度々ありました。彼等は常日ごろ薬を服用していないのでその効果は早く「謝々」と喜んで、お礼にと種々の物を待つてきてくれました。

この宣撫工作は終戦後、支那人が私達に対する親切的な姿として現われました。軍医殿が立派なお方で赤十字精神を大切にして、敵味方なく治療を施し投薬をすすめられました。

第一戦の現場では救急処置を施し、動ける者は

前線に返し、動けない者は担架に乗せてクリーク側まで運び、団平船で陸軍病院まで運びました。

病院船が入港するころには負傷者や病人を病院船に移送し、内地へ送ったこともありましたが、昭和二十年に入ってから米潜水艦の出没が激しくなつて病院船も来ることがなく、内地への移送は出来なくなりました。また、香港には海軍病院があり、同伴して病人を送ったこともありました。

南支は暑くて巡回するのも大変でした。私達は戦闘部隊の後を追うようにして負傷者を発見し救助する役目ですから、ゆっくり休む暇もありませんでした。助かったのはクリークが水路として整備されており、多くの水上生活者から小舟を接収して負傷者や病人を輸送したことでした。

暑い中で風呂も入らず走り回るのでしらみを体中背負つて行動することになり、また時折アメリカのグラマン戦闘機がクリークを輸送中の団平船目標に機銃掃射をするので危険にさらされることも度々ありました。

私は当初戦地へ志願しました時にはニューギニア派遣となり、鹿兒島港まで列車で行きましたが、ニューギニア行きの船便がなく、久留米に引返して来た時に患者輸送隊が編成され、その一員に加わったのです。ですからニューギニアの苛烈な戦闘のことを考えれば、これくらいの危険はなんのそのと毎日の任務に精励しました。

支那兵が私達七人の小グループの十字の腕章を見て、貴重品である医薬品を持っているので度々襲つて来ましたが、幸い傷一つ受けず任務を遂行することが出来ました。

死亡者を見つけた時は土葬にしたり、時間があれば草木を集めて火葬することもありますが、なかなか焼けず一晩中かかって燃やすこともありました。こんな様子をご遺族がご覧になったらどんなに悲しまれるであろうかと思い、火葬も出来ず穴に放り込んだ人達のことを思うと、火葬に出来るだけでも恵まれているなど手を合わせることも度々でした。

私達は、五人の軍医にそれぞれ下士官一人、兵隊五人で五個分隊に別れて負傷者や病人の治療と輸送を担当します。そして第一線の戦闘部隊と違い地味な任務でしたが、敵味方の区別なく治療も施し薬も与えましたのでやりがいのある任務でもありました。

クリークで運んで来た患者は陸軍病院から来た受取りに手渡しをして、私達は病院の庭でドラム缶に軍服シャツを投げ込み煮沸してしらみ退治をしました。

一旦、陸軍病院を後にして次の戦場に行きますと、病院に帰るまでは二十日間ぐらいかかりました。戦死者は戦死された年月日と氏名を明記します。また病院を出ますといつ敵に襲われるか、死を覚悟しての毎日でした。腕の十字の腕章で薬を待っていることが分り、人数が七人と小人数のため襲いやすく、何回も襲撃を受けました。

その都度近くの友軍が応援に来てくれましたが、危険を避けるために十字の腕章をはずすこともあ

りました。そして衛生兵の立場で私達から発砲することはありませんでした。また便衣隊といわれる集団が支那全土で日本軍を悩ましていました。

人影がないからと人家に踏み込みますと、穴を掘ってその中に怯えながら隠れています。出てきなさいと穴から出して病人がいれば薬を、傷ついでいれば治療してやりました。

中支那から南下して来た鳳兵団二百人ぐらいの戦闘部隊と遭遇した時、偶然にも島原市出身の浜川見習士官と会いましたが、連日の戦闘で大変疲れている様子でした。

私達が終戦を知ったのは、九月に入って負傷者を留関の仮診療所に連れて行った時で、「終戦になつたらしい」との情報がありませんでしたが「またデマか」と信じない人達が多かつたようでした。その後広東の陸軍病院に帰り、事実であることが分り、がっかりしました。こんなに苦労したのに負けたのかと残念の涙があふれました。そして私達は武装解除され、丸腰になって陸軍病院で病人や

負傷者の看護に従事しました。

鳳兵団は広場にテントを張り、寝泊まりしていましたが食事には困っていたようでした。少しの唐米と野菜は春菊ばかりで醬油、味噌等がなく食べるのに大変のようでした。幸い私達は病気でしただから少しは助かりました。その上私達から薬や治療を受けた現地の人達が種々の物資を持って来てくれ、大変助かり、またその好意が嬉しく思いました。

この物資を鳳部隊の浜川見習士官にも分けて上げたら喜んでくれました。そして終戦後も私達に對して支那の一般人は冷たい目で見ることもなく、先生（シーサン）と抱いてくれましたので、衛生兵でよかったですと思いました。いざ帰国となつてLS艇に乗船して帰る時も港で手を振って送ってくれました。病人に上げた一服の薬、傷ついた人への治療にこんなに恩義を感じてくれるのかと敵国人同志でしたが嬉しく思いました。

長崎に小さな爆弾が落とされて全滅したようだ

と聞いたのは九月に入ってからでした。私が長崎県人でしたので特に心配して教えてくれたと思いますが、当時は原爆とは分らず小さな爆弾といっておりました。広島出身の青木軍医も広島が全滅と聞かれて重病人と一緒に残られましたが、数年後戦友会開催の折には青木軍医のお家族全部が原爆によって死亡されたと話しておりました。

早く帰国する憲兵の中に、持ち帰る遺骨の箱の中に貴金属類を隠しているのが発見され、その後は遺骨の取扱いも難しくなりました。

復員が許可されたのは昭和二十一年の四月の初めでした。復員船LS艇に軽病者、看護婦、軍医、衛生兵と乗船し広東港を出港しました。二階に女性達、一階に男子と区別され日本に向いましたが、予定の佐世保港ではなく浦賀港に五日間して入港しました。上陸地が変更になったのは、広東地区がコレラの指定地で検疫の関係でした。

浦賀港に入港しますと、数多くの復員船が停泊しており、みんなコレラの指定地からで検疫のた

め上陸出来ないとのことでした。私達も入港すると同時に検査官が乗り込んで来て、注射を打つ、DDTを振り掛ける等消毒が始まりました。上陸する所ではなく毎日が消毒でした。そしてコレラには潜伏期間があるため大事をとって船中生活が始まりました。入浴も出来ず、消毒々々で三カ月間かかりました。その間に自宅への郵便を出すことが許され、元気で浦賀まで来ていると通知しました。

七月の初めやつと上陸を許可され、無蓋車の復員列車に乗車し浦賀駅を出発しました。爆撃で荒廃した街々の姿を見ました。戦地ばかりでなく本土でも皆がどんなに苦勞したであろうかと思ひ、戦争の悲惨さを思い知らされました。

貨車は暑い太陽に照らされ、九州に入り、長崎本線の諫早駅に到着しましたが、雲仙に帰る便がないというので、郵便局に勤務している妹に電話しますと、郵便車に便乗するようというので郵便車係に事情を説明し、雲仙の自宅に帰ることが

出来ました。浦賀からの郵便で家族は安心して迎えてくれました。それでも私の元気な姿を見て涙を流して喜んでくれました。

翌日南支那のクリークでグラマンの機銃掃射で戦死した有家町の中村戦友の遺骨の一部を持ってご遺族の方に当時の状況の話と共にお渡ししました。その時の辛さは例えようがありませんがご遺族の方が涙を流しお礼を申される姿を見て「ホット」しました。

このころ、進駐軍のアメリカ水兵が佐世保から雲仙温泉に休養に来ており、父はこのアメリカ兵相手に乗馬クラブを経営しておりました。私はその仕事を手伝い、アメリカ兵も喜んで乗ってくれました。当時一時間二百円ぐらいでしたから、結構仕事になりましたのでしばらく手伝いを続けました。

私はこの度の大战で多くの方々が戦死されたり負傷されたり、また病氣となり病死された方々を多く見て来ましたが、入隊早々衛生兵を希望し衛

生兵として任務に服したことに誇りを持ちました。

一発の歩兵銃を発砲することもなく、敵味方の区別なく治療を施し、薬を与える機会があつて、南支那を離れるまで支那の一般民家から「先生謝々」と感謝されてきたことは生涯忘れることが出来ません。愛の精神と奉仕の精神は何物にも優る貴重なものと心に刻み、八十五歳になる今日まで世のため人のためにと微力を尽しております。